

貝原益軒の教育思想への一考察

—江戸の子育法と教育書を通して—

(平成 27 年 8 月 31 日提出, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

A Study of Ekken Kaibara's Educational Ideas Through a childcare method and educational books in the Edo period

奈良学園大学人間教育学部

松田 智子

MATSUDA Tomoko

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：社会的子育てネット, 孝の家庭教育, 年代別教育法, 習俗としての儒教

Abstract : This paper aims to analyze how Ekken's educational ideas, especially “*Wazokudouzikun*” and “*Yamatozokukun*”, were accepted in the Edo society. Ekken's educational ideas have been affected Japanese home education. In Edo period basically had been kept peace and social order. At that time, younger men maintained social order also they had played a role children to train about respect the vertical relationships and good manners. Ekken supposed that parents should learn the educational knowledge, because they greatly influence to their children. Later Ekken published lots of educational books in written kana characters for the public. His philosophy was based on confucianism as folkways in the capacity of manners and customs. It was purposed virtuous acts – “Kou” with an emphasis on Jin and Rei. He mentioned that it should be a strictly education before children work iniquity. Ekken's theory of education plan and practice based on the growth of children got grass-root support. In additional he gave the parents a good scolding for overprotection of their children

Keywords : Social child-rearing Network, Home education of “Kou”, Teaching method by age, Confucianism as folkways

1 はじめに

戦後 70 年が経過し、子どもが今日ほどかわいがられ大切に保護された時代は、かつてなかった。核家族化と少子化のなか、「一人ひとりの子どもの個性を尊重し、その子の自己実現を支援する」を合言葉にして、保護者も学校も巻き込んで、日本の教育は「我子中心主義」といわれるような教育を突き進んできた。我が子だけは偏差値の高い学校へ進学してほしい、有力なスポーツ選手になってほしい、保護者の願いはいつしか独りよがりになり先鋭化して、その矛先は学校に向けられるようになった。いわゆる「モンスターペアレント」

の苦情と要望の出現である。

しかし、子どもは古代ギリシア時代のアリストファネスの喜劇『雲』にも描かれているように、必ずしも親の願いどおりには育っていかないものである。今日では近世の江戸のように親子関係を調整する大家族もなくなり、教育熱心な家庭ほど、正面から親子で対決するという不幸な様相を示している。従来は、家庭教育は子どもを社会の一員として一人前に育てる原点であった、近代的自由主義という美名に隠れ今やそれも内部から崩壊をしつつある。

では、家庭を外から見守り支えていた地域社会の教育はどうだろうか。今日の地域には、我が子第一と独

走する親をいさめる長老や顔役は存在しない。挨拶ができない、煙草を吸って仲間をいじめる子どもを叱ってくれる、近所の怖いおばさんもない。個人情報が尊重され、隣家で子どもが虐待死しても、プライバシー保護が言い訳として許される世の中である。

江戸には「若者組」や「子供組」「娘組」という地域集団が存在し、そこでは年齢の上下の秩序が価値をもち、同世代ごとに共同して集団作業や共同作業を通して次世代を教育・訓育するシステムになっていた。この社会教育組織が存在し、庶民を互いに規制する役割を果たしていたが、これも封建時代の残滓として嫌われ消滅していった。また子どもが一人前になる神聖な儀式であった成人式が、行政の主催で一斉に執り行われ形骸化し、式典での若者の乱れを抑えるのに苦慮する有様である。残念であるが、地域の教育力は、確実に低下していると言える。

筆者は、このようになった理由を考えるに当たり、まだ公的教育機関である学校が存在しなかった近世の江戸の教育に、この病理を治すアイデアが潜んでいるのではと期待しつつ本稿を論述する。さらに、江戸時代の儒学者である貝原益軒の教育思想とそのベストセラーである『和俗童子訓』と『大和俗訓』に焦点を当てつつ述べていくこととする。

この益軒の2冊の著作は、本来士族の子弟を対象にしたものである。しかし彼は、漢字を知らない庶民ために自分が今までに学んできた道理を仮名文字で書いて、世の中のことを知らぬ夫婦にも広く知らせたり、豆と麦を区別できないような幼い子にも分からせたいと願って『大和俗訓』を書いたと述べている。また、『和俗童子訓』は、町から離れた辺鄙な村のため、教育する師もなく学者もいないところの子どもたちのために書かれたものである。益軒は、父母が読んで子育て役に立ち、子どもの徳性を涵養し礼法を重視する教育のために、かつて子弟に教えた教育理念を分かりやすく仮名で記したと述べている。

2 社会一体の子育てネットワーク

江戸時代の教育の強みは社会の組織力にあったといえる。公的な学校がなかった江戸時代では、文字文化だけではなく非文字文化も一体化して、両者が連携し教育が実に円滑に行われていた。誕生した赤子が家族や地域に護られ、社会の共同生活の中で自立した大人に成長することは、すべての人間が通過する基本道筋である。その教育を長期スパンで考えるなら、寺子屋

で学ぶ読み書き算術とは教育のごく一部でしかなく、文字を介さない音・声・身振り等の非文字文化による教育の価値の大きさにも注目しなければならない。

江戸の教育を下支えしていたのは、「人を跡継ぎとして一人前にする」という有史以来継承されてきた社会共同の非文字文化による教育である。しかし今日では、生育・成長の節目となる儀礼も形骸化し、地域共同体はその役割を果たさなくなっている。誕生や1歳・七五三等の儀礼は少子化も相まって一見華やかになっているが、商業ベースのものとなっている。江戸では人の一生の折り目は明確にお互いが確認でき、まして成長の節目を大切に、家族と近隣の人々が一体となって祝ってきた。なかでも、子どもから大人になる際に入ることを許される男子で組織された「若者組」の役割は大きい。家族と地域共同体の子育て、寺子屋での読み書き算術の学習、若者組での一人前になる鍛錬、それぞれが重複しながらも連携し一貫した教育を行っていた。

益軒は、「若者組」や「子供組」「娘組」という地域共同体組織の中での人との交わりの際に、人間としての礼儀や振る舞いがとても重要であると『大和俗訓』で次のように述べている⁽¹⁾。

人に交わるにはつねに礼儀を正しくしないといけない。礼儀のはじめは、まず威儀をととのえることである。威儀とは身の形儀のことをいう。衣服を正しく、顔色をととのえ、形を厳にし、言葉を順にするのを威儀という。とくに言葉づかいは、相手をうやまって無礼であってはならない。言葉の不法なのは身分のいやしいものの交わりである。言葉・容貌は内心が外に見える符である。言葉と容貌とを見聞きすると、その内心の善悪がわかるから、慎まないといけない。また、言葉のうやまいすぎたのも礼ではない。それはへつらっているのである。過不足のないようにしなければならない。

礼儀には言葉づかいや挨拶だけでなく、衣服や振る舞いまでも含めるとしている。続けて、人にむかってものをいう場合には、自分の地位と年齢のほどを顧みて、また相手の地位と年齢のほどを知ってから、適宜に振舞うのが礼であると述べ、地域の共同体の中での上下関係の心得も教授している。筆者は「言葉のうやまいすぎたのも礼ではない。それはへつらっているのである。」という言葉も、益軒の人間としての善を感じ

じる。

引受人から先輩に引き渡された新入りの若者は、親・家族の手を離れて、そのまま寝宿で合宿生活に入る。2年目3年目の先輩に、若者組の掟を叩き込まれ、徹底して口伝の条目を暗唱させられる。条目は口から耳へそして口へと共同体の暮らしと一体となって時代を超えて伝えられてきたものである。若者組は15歳から30歳ぐらいの年齢の男子をすべて組織し、村の共同体を維持する重要な役割を果たし、火事や水難など非常事態の災害から地域の人々の生命を守る任務も帯びていた。

このような役割を担うため、半人前の生意気な若者を一人前の働き手にするために、若者組に甘えや油断は許さなかった。最年長の指揮のより行動し、厳しい上下関係や一定の掟の中で指導や教育がなされた。挨拶をしない、集会に遅刻する、組の掟を破れば厳しい叱責があった。非常事態に集合しない、親不孝な放蕩を続けていると、家族もろとも村共同体から除名(村八分)されることもあったという。

益軒も子どもが10歳になると家庭外の教を育受けることを『和俗童子訓』で奨励している。その理由として、2つ挙げている。

①父母のそばに何時も子どもを置くと、恩愛に慣れて甘え気ままになり、努力して困難に耐えることができず、無駄に時間を浪費する

②孝弟の道を父母が教えるのは、自分たちへ仕えることを勧めるわけなので指導しにくい

上記の理由で、子どもを昼夜外に出して父母以外の師や学友と交わるほうが、知恵が日々進歩し子どもが善くなると論じている。

このように江戸時代の子どもは、大人の仲間入りをするため、様々な人の集団の中で育てられたのであり、多くの人が関わりつつ子どもを育てるというシステムが存在したのである。

3 江戸の教育は家庭が中心

(1) 乳幼児教育

江戸時代の教育でも、今日と同じく胎教から始まり乳幼児期の教育が強調された。正保4年(1647)年に中江藤樹が記した『鑑草』に、胎教について妊娠中の心得が記されている。妊娠中は邪惡なことを考えず、食物や環境や振る舞いに気を付けるべきで、過激な色を見たり邪惡な話を聞くことは避けて、昔の賢人や君子の物語を読んだり聞いたりすることが、母や胎児

に良いと述べられている。つまり妊娠中はできるだけ、善良なものに触れることを勧めている。書物に縁のない女性でも、美しい女子を望むなら美人画を見ることが、丈夫な男子を望むなら武者絵を見るようにすることが良いそうである。

『和俗童子訓』の序には、乳幼児教育の重要性について次のように記されている⁽²⁾。

赤ん坊は人生のはじまりである。この時はだれもみな誰も性質が似ている。誰もまだものを習っていない。理性や思考もまだ起こっていないが、その善をなし悪をなすわかれ道はここにある。ごくわずかの正邪をわきまえて、善をもって導けばよくなる。これははじめを慎む理由である。

益軒は、幼児期の子育ての多くの失敗は幼児に接する父母・侍女・乳母等の悪影響が原因であり、その結果として幼児の本性(善)が失われたのだという。子育てにおいて重要なことは「表裏」「臆病」「傲慢」の三悪を排除することであるとも言っている。『和俗童子訓』には乳母や付添の性格の重要性を述べている⁽³⁾。

子どもを育てるには、生まれて乳母を求めるときに、かならず温和で慎重深く、忠実で、言葉の少ない者をえらばないといけな。乳母のほかに、つきそう者を選ぶときもだいたいこのようにするがよい。

子どもがはじめて物を食べ、人の顔が判別できるようになれば、つねにその場に応じて教育をするべきであり、子どもが大きくなってから邪惡さを教育で矯正しようとしても間に合わない主張している。

子育てにおける三悪の「表裏」とは、子どもにしばらく泣き声をたてさせまいと思って、だましたりすかしたりして姑息の愛を見せることである。もし、そのことが真実でなかったらこれは偽りを教えていることとなり、その場限りの嘘をつくことになる。「臆病」とは、我儘な子どもに言うことを聞かせたい時などに、怪物が出るなどの恐ろしいことを聞かせて、驚かせて従わせることである。益軒は、大人が幽霊や化け物など本当に存在しない物語を子どもにすることを禁じている。「傲慢」とは、父母が子どもを過保護にすぎたために、そのため甘えて父母を畏れず、年上のものを馬鹿にして家族を苦しめ、万事に気ままにして人を馬鹿にする態度のことである。これら三悪のそれ

それぞれについて、次に詳しく解説することとする。

(2)「表裏」について

先述の三悪の中で一番大切な訓育とされたことは、「表裏」つまり嘘をつかせないことである。益軒は「表裏」については大変手厳しい⁽⁴⁾。

幼児から心と言葉に忠信を主とし、偽りのないようにしなければならない。もし人をあざむき、偽りをいったら、きびしく戒めないといけない。こちらからも幼児をあざむいて偽りを教えてはならない。こちらから偽ると小児はこれにならうものである。かりそめにも偽りをいうのは人ではないと思うがよい。心に偽りと知りながら、心をあざむくのはその罪はいよいよ深いものである。また、人と約束したことがあったならば、かならずその約束を違えないようにしなければならない。約束を違えては、偽りとなり、信用を失えば人ではない。

つまり、益軒の「嘘をつかない」とは心と言葉に嘘をつかないこと、約束を厳守すること、そして親が子どもに絶対に嘘をつかないことである。筆者は、益軒が「嘘をつくのは人ではない」と断言するところに厳しさを感じる。大人が「子どもを欺くな」という論は、江戸後期の心学者の小町玉川の『自修編』にも述べられている。

(3)「臆病」について

医者香月牛山は『小児必要養育草』のなかで、幼児を神前や仏前に連れて行って、怪しい形相の鬼神や恐ろしい人形を見せたり、また高いところに抱き上げたり、深い淵や流れる川を見せたり、牛馬の側で鼻息を当てさせるなどの恐怖体験は、子どものストレスの原因になるとした。そして過度のストレスを与えるのは幼児にとりよくないが、少しのストレスは鍛練としては必要でもあると述べている。

益軒と牛山の意見は似てはいるが、実は少し異なった考え方をしている。冗談でも恐ろしいことを聞かせて臆病な子にすることは、牛山と同様に反対をしている。しかし益軒はそもそも幽霊や化け物や怪物などの話は本当でないと、その存在自体を否定しているのである。益軒は、『大和俗訓』で、世俗には嘘が多いと

いう。⁽⁵⁾

世俗の語り伝えることにはうそが多い。全部を信じてはいけない。ことにあやしいことは多くは偽りである。神仏の奇跡も俗人の語り伝えることはうそが多い。およそ正法には奇怪というものはない。奇怪のあるのは正法でない。(略)鬼魅狐狸のしわざには奇怪なこともある。それも多くはうそである。

そもそも益軒は、大人は怪しいことを聞いても、自分の目で確かめないとはいけないし、正確でないことは幼児に対して口にしてはいけないという。大人でも愚かな人は奇怪なことを聞くことで、嘘を信じてしまうというのである。さらに、本人が確かに見たと思ったことであっても、心や目の病で怪しいものが見えることがあると言っている。しかし本当に見たと思っても、それにも訳があって、結局は怪しいものは存在しないと断言している。幽霊や化け物や怪物が、身分に関係なく当たり前信じられ語られていた江戸時代において、これほど明確に否定することができるのは、益軒が優れた儒学者であるとともに、地理・歴史だけでなく科学や医学などの幅広い豊かな知識を身に付けた学者だったからであると筆者は推測する。

(4)「傲慢」について

子どもを溺愛することは「傲慢」のもとである。益軒は「傲慢」の良くない理由を『和俗童子訓』で人の三愚として述べている⁽⁶⁾。

人の悪徳は矜である。矜とはほこるという字である。高慢のことである。矜になると自分をよしとして悪いことを顧みず、過ちをとがめられても改めない。だから悪を改めて善に進むことができない。たとえすぐれた才能があっても、高慢で自分の才をほこり、ひとをあなどるのは凶悪の人というべきである。およそ子どもがよいことをしても、才能があってもほめてはいけない。ほめると高慢になって、心だてをきずつけ、自分が愚かであっても、不徳があっても顧みないで、自分に知恵があると思って、自分の才能に満足し、学問を好まず人の教えを求めない。

益軒は、続けて特に父親が溺愛のあまり、性行不良にもかかわらず我が子を誉めることは、有害であるだ

けでなく他人から軽蔑される行為であるとしている。

現代の教育者や保護者の中には、益軒のこの考えに違和感を覚える人も多々いるだろう。今日では、自尊感情の低い子どもの意欲を高めるために「誉めて育てる」ことの重要性が、教育界では声高に主張されているからである。筆者も子どもの良い点や成長の過程を評価し、子どもや指導者にフィードバックすることには大いに賛成である。

ここでは、益軒の論について誤解が生じないように、人の才能や善行を誉めることの意味について述べた『大和俗訓』を紹介しておこう。益軒が、まず謙虚さを教え、その後に才を習わせよと主張しているのは多才が時として凶悪に繋がるからである。先般のオウム真理教が引き起こした地下鉄サリン散布事件などは、その代表例であろう⁽⁷⁾。

わが身にどんな才能や善行があっても、口に出してほこってはいけない。その才能をほこると、その才能を失い。その善行をほこると、その善行をうしなう。おしまなければいけない（略）わが身をほめなくても、わが善いことも悪いことも、人の心にしれるものである。たとえわが才能と善行があらわれず人が知らなくても、わが身の徳には害がない。わが身の才能がすぐれていても、みずから人に告げてほめるのは、みずから媒をするという。いやしむべきことである。その不徳の程度が誰にもわかって、はなはだしく人から軽蔑される行為である。

筆者は、この説を読むと、現代人の中に「自分こそが主役で中心である」「目立ち誉めてほしい」という振る舞いが、大人にまで多く目立つ現象が恥ずかしくなる。さらに、第2次世界大戦中の軍国主義教育への反動から、戦後の教育では「豊かな自己表現」「独創的な個性」を育てるという美名のもと、実は「自我肥大」や「自己中心主義」を許してきたのではないかと筆者は自省する。心理学者の梶田(1998)は、自分自身が生きている「私の世界」を大切にしつつ、親しい人や大事な人が生きている「あの人の世界」、そして人々がこうゆうものであると言い交している「皆の世界」のバランスをとりつつ生きることの重要性を述べているが、まさに「たとえわが才能と善行があらわれず人が知らなくても、わが身の徳には害がない」という言葉に、筆者は益軒の「私の世界」を垣間見る。

江戸時代の教育を支えた社会の秩序や規範である非文字文化を、益軒は庶民や特に女性に分かりやすい仮名文字で表記し、広汎な父母に適正な子育て思想を広めるうえで大きな役割を果たしたと言える。

4 年代別教育法の流行

日本には、古くから年代別教育法は存在した。例えば、室町時代に世阿弥が著した「風姿花伝」には、7歳から50代までを7つに分類し、年代別に能の修行方法や心得を述べられている。教育熱が高い江戸時代になると、年代別教育法はますますさかんになっていった。年代別教育法がさかんになることは、社会全体が平和になりそれを維持するための秩序が、子育てにおいても重視されるようになったことを意味する。

江戸初期には、慶安2年(1649)に『悔草』が出され、翌年には徳川家康の9男徳川義直が、庶民向けに啓蒙的著作として年代別教育法を執筆している。しかしこの『初学文宗』は、広く世に出されることはなかった。その後も続々と年代別教育法の書は登場するが、益軒の随年教法ほど江戸の庶民に影響を与えたものはない。彼の著作は老若男女問わず日本人のあらゆる階層から支持され、当時の日本人の思想に多大な影響を与えた。特に益軒が晩年に著した仮名書きの教訓書の数々は、女性にも普及して、嫁入り道具の一つにまで加えられていた。

(1) 益軒の随年教法

『和俗童子訓』は、父母に対する教育の手引書として、まず巻一の総論で教育を始めるのは早い時期が良いと述べている。さらに人間には教育が必要であること、そのための師の選び方、子どもを過保護にせず厳しく教育して困難に耐える人物に育てる必要性が何度も繰り返し述べられている。さらに巻二には学問の目的や、教育する際の子どもの叱り方誉め方など、教育方法の技術論が登場する。

巻三には、随年教法が出てくる。つまり年齢に応じて、何を学ぶべきかの順序など年代別の教育課程が示されている。年齢に応じた教育内容とともに、益軒が大切にしていた読書法は別に項目を起こして、細やかに書を読む意味にはじまり読書順序や方法にも触れている。巻四は手習い法、つまり読むことが進むにつれて次の書くことに進むのである。この順序も今日の小学校国語科教育法の順序性に非常に似ている。益軒は、字を書く手順や、書体の特色まで丁寧に指導をし

ている。

巻五の女子を教える方法になると、益軒の教育課程に中国の『女四書』の影響を色濃く感じるとともに、江戸の女子教育との現状との差異にとまどいを覚える。江戸の女子教育は、男子の教育と呼応して遅れながらも、歴史の陰で広く深く普及していた。筆者は、江戸時代の平和を秩序と儒教の道徳(孝と忠)で維持しようとした益軒の立場性の限界が要因であると思うが、これについては益軒の社会的な役割とともに、後でも触れたい。

(2) 男子の随年教法

○6歳

数字と方角を教える。生まれつきの利鈍を推しはかり、和字を読ませ字を書き習わせる。世間一般の往来もので仮名文の手本を読み書きをさせる。目上を敬うことを教え、尊卑・長幼の区別をわきまえ、言葉づかいを教える。

○7歳

男女は席を同じくせず、食事と一緒にしてはいけない。ききわけがよくなれば、徐々に礼法を教える。7歳以前は早寝早起きをして、食事の時間も決めず、子どもの心に任せる。真書・草書の文字を書き習わせ、はじめから書風の正しい文字を書かせる。はじめは小さい文字を書くと手がすくむので大字を書き習わせる。文句が短くて読みやすく覚えやすいものを読ませ、暗記をさせる。はじめは早朝に書を読ませるが、食後には読ませない。半年経過すれば、食後にも読ませる。

○8歳

子どもに歳相応の礼儀を教え、無礼を戒める。立居振舞の礼や、目上の前に出て仕えることや退く方法、目上の客に対してものを言い、返事をする方法、食膳を目上の人に据えたり片づける方法、盃をだし銚子を取って酒を勧めたり、肴を出す方法、茶礼などを習わせる。門戸の出入りや座席で飲食する際は、必ず年長者の後に行動すること。このころからへりくだったり人にゆずることを教える。子どもの心に任せるのではなく、我儘をかたく戒める。才能があれば8歳から14歳までの7年間に『小学』『四書』『五経』をすべて読み終わる。これらを熟読すると学問の根本ができる。

○10歳

10歳から師につけて従わせる。五条の理や五論の道を大まかに教え、聖賢の書を読ませて学問をさせる。書の中で義理の分かりやすく、論しやすい大切な

箇所を説き聞かせる。その後、『小学』『四書』『五経』を読ませる。その合間に文武の芸を磨かせる。世間一般では、11歳ごろにようやく手習いを教えるが、これでは遅い。

○15歳

大学の学問を始める。もっぱら義理を学び、身を修め、人を治める道を知る。生まれつき鈍くても20歳までには『小学』四書の大義は分かるようにする。

○20歳

元服を迎えて大人の道にはいる。幼少の時の心を捨てて、大人の徳に従い、広く学び、立派な行いをしなければならない。

第三巻以降の年齢別の教育課程は、江戸時代の日本の教育のレベルの高さを示すものである。17世紀のヨーロッパにもこれだけの整った教育課程を示している国はないと言われている。

(3) 女子の随年教法

益軒は、女子とはいつも家の中にいて外に出ない存在と規定している。それ故、師友にしたがって道を学び、世間の礼儀を習う方法がないため、女子にとっての教師は父母のみと述べている。つまり、女子の教育は父母が担うものと決めつけているが、実際の江戸時代の女子教育はそうではなかった。特に江戸後期は女子の寺子や手習い師匠が現れるなど、女子教育の現状は益軒の主張する儒教の教えとは異なる様相を示していた。

○7歳

仮名を習わせ、また男文字(漢字)を習わせる。みだらでない古歌を多く読ませ風雅を知らせる。はじめは数目ある句、短いことをたくさん読み覚えさせてから『孝経』の首章、『論語』の学而編、曹大家の『女誡』などを読ませる。

○10歳

家の中にだけ居るようにして外には出さない。織縫や糸をよったりつむいだりする技を習う。小唄・浄瑠璃・三味線の類みだらなものに触れさせず風雅なことに触れさせる。ものを正しく書くことを教え、算数を習わせるのが良い。ものを書いたり算数を知らないの家計がうまくできない。

○嫁入り前

女子が嫁入りする前に、父母が教えておくべき十三か条(夫の家を守る教え=女徳)の教えを知って、掟

を破らぬよう戒める。

女子が嫁入り前に学ぶ十三か条の中心思想は「夫は天の如く妻は地の如し。されば地は天の恵みを受けて万物を生ずるもの」(女論語第七章)「陽は剛く陰は柔かなるは自然の理にて、男は強きを貴び、女は弱きを美とす」(女誠第三章)などといわれているように「天と地」「陽と陰」のように男と女の間を上下に位置付ける世界観であった。しかし、封建時代である江戸時代といえども女子をそのように育てるのは現実の女子教育とは合致していなかったことが多くの文献に散見される。

益軒は儒教女訓のなかでは、修養、特に四徳の育成の必要性を述べている。四徳とは、婦徳(女らしい態度や礼儀)、婦言(女らしい言葉づかい)、婦容(女らしい身だしなみ)、婦工(家政上の技術)を総称するものである。女性としての家事の技術である婦工よりも、人間としての在り方に通じる婦徳に高い価値を置いている点が、学問の目的を善を行うことと捉えた儒学者益軒らしさであると筆者は考える。

(4) 香月牛山の年代別教育法

香月牛山は若い頃、同郷の益軒から儒学を学び、のちに医学を学び筑前(福岡)で開業した人物である。彼は益軒とは非常に親密でありお互いに信頼する間柄であり、たびたび両家で飲食し、牛山が益軒の病氣治療に出向いたりしている。彼は正徳4年(1714)年に『小児必要養育草』を発刊し、その第6巻で5・6歳以降の年代別教育法を論じている。本書は、当時の小児養育がおろそかなことを嘆いた牛山が、出産から10歳までの子どもの養育や養生の心得を誰にでも分かりやすく仮名で書いたものである。

牛山は、年代別教育法の特に10歳以降については、益軒と同様の説を詳細に述べている。それを小泉(2007)は次のように紹介している。

- ①人の人たる所以は教育の有無による。子育ては「先入主」が重要で、幼児に見聞きしたことが一生の徳義となるから、良い師良い友を選んで教えよ。
- ②手習いは朝10回、昼30回、夜10回習う。手本1冊を15日と定めて、5日に1度清書をさせ、3度目は暗書(手本なしで書く)させよ。学習方法は手習い師匠に従え。
- ③礼儀作法を習わせよ。小笠原家では8歳の時から「素礼百返」と定めて毎日習わせる。諸礼に自然と慣れれば大人になってから人前でも落ち着いた立居振舞

ができるようになる。

- ④算用は10歳から習うべきである。昨今の物知りの武士などは「算用は商人の業で、武士たる者のすべき事ではない」というが、誤りだ。人の将たらん者は算用を知らなければ軍旅を整えることもできず、天文・地理の学問にもすべて算用が不可欠である。士農工商ともに算用を知らずに、物事を成就することはできない。

- ⑤しかしながら、子どもの算盤が早く、人前で算用、金銀、利得、売買のことを言うのは見苦しいことであり、従って、算用をはじめ一切の芸能は「知りて知らぬ」というように芸を隠して、必要な時に取り出して使うべきである。

牛山は、教育によってどのような傍若無人の振る舞いをする「地下がかり(田舎びた)」の子どもでも、よく教えれば善良になるものであり、子どもが善良でないのはすべて父母の教育の結果であるとまとめている。

つまり江戸の初期の教育は、家庭内の父母による教育を第一に位置付けつつ、外の寺子屋などの師匠による教育により補完されていたと考えられる。しかし江戸時代も後半になると、内なる産業構造改革や流通機構の発展とともに、外からの政治的な危機感もともない、教育の必要観が広く下層の庶民にまで広がり、寺子屋等の外での教育の占める割合が増加する傾向になった。

5 江戸前期の教育思想

(1) 益軒の生きた時代

江戸の教育に大きな影響を与えた益軒は、1630年に生まれ、1714年に84歳で亡くなった。彼が主として生きた17世紀とそれ以前とを比較すると、大きく異なるのは、戦乱と変化の時代から平和と秩序の時代への移行である。江戸時代以前の約150年間は基本的には、戦乱の時代であり武力による自由競争と下剋上の時代であった。戦いは、多くの庶民の犠牲のもとに行われていたため、徳川氏による天下統一を庶民はほっとした安堵の気持ちで迎えただろうと筆者は推測する。通史を学ぶ立場から見ると、徳川氏により士農工商という身分制度が決められ、孝という家中心の価値観が存在し、男尊女卑の教育が行われ、平和と言っても身動きできぬ制約がある封建制度に対し、庶民が安堵すると考えることは能天気だと批判があるだろ

う。筆者も学生時代は、江戸時代の封建制度を暗い抑圧と搾取の時代であったと認識してきた。しかし、当時の庶民は、乱世に生きて朝に夕に戦に駆り出され、やっと難を逃れても盗賊に追われ、身の置き所もない状態で、危険が高く昼間でさえも自由な往来はできなかったのである。彼らの中に、制約付ではあるが死と隣り合わせの生活から脱した安堵の気持ちが起きたことに、筆者はやはり共感できる。そしてこの庶民の安堵感が、支配者からの秩序である新たな政策を受け入れる基盤となったと考える。益軒も『楽訓』の中で平和の喜びを語っている⁽⁸⁾。

大君の御恵みによって、こういう太平の時代に生まれ、堯・舜の仁にあって、白髪まで戦争に合わなかった、これは大きな楽しみではないか。邵康節が世に感謝した言葉に『太平の世に生まれ、太平の世に老い、太平の世に死ぬる』と言ったのはまことに大きな幸いである。今の世の人はみなそうである。

(2) 益軒の儒学の意義

江戸時代のように長く社会を統一して秩序を維持するためには、支配者の力が被支配層に広範囲に及ぶ必要がある。それには、上から支配を武力として押し付けるだけでは反発が起きるが、被支配層が上から押し付けられた施策や秩序を、自らの秩序として受け入れる基盤もあれば、より施策がもたらす効果が大きくなる。戦国時代は支配者が武力で秩序を維持してきたが、江戸幕府成立以降は支配の安定も一定確保され、武力とともに文化や哲学(特に儒学)や教育を通して秩序を安定させる方向に徐々に向かっていった。

松田(1969)は、益軒を人民の儒学者と位置付けて、次のように分析する。江戸時代の武士の立場の中でも、政治支配者としての自覚から儒学を政治学に高めたのは荻生徂徠である。政治支配としての儒学は頂点に達した後は、その内容を武士のモラルと人民のモラルを折衷させて支配秩序を維持するように修正されていった。益軒の仕事は支配層の儒学の俗化に対応して、人民の中において儒学を民族化することであった。益軒の意図には、必ずしも支配の意識は明確ではない。むしろ彼は忠実な儒者として宋の儒学を解説し、それにより民生日用に役立て、人民の生活を安定させようとしたのであろう。益軒の意図が成功したのは秩序の中で生活を安定させたいと願っていた人民の日常生活に、人倫の道を示した儒学が有効だったから

である。人民は制約された範囲の中では精励と節約、そして家という集団により幼児や老人を保護しなければならなかった。しかも貧しい経済状態では、家族全員に機会均等を与えることはできない。そうなると一部の人間を犠牲としなければならず、犠牲とされたのが女性と下部と称される被雇用者である。社会の中で武士の支配の秩序が維持されなければならぬように、家の中でも家父長の支配が維持されなければならなかった。秩序とそれを維持する人倫をとく教えが人民の中に受け入れられる基盤がそこにあった。精励と節約を実行すれば、人倫の道を守る限り、父母は老衰しても遺棄されることはなかった。その拠点が家であった。

筆者は益軒の儒学が庶民を支配ための有効な役割を果たしたことを客観的な事実として納得する。しかし『大和俗訓』を読む限り、これが単なる支配の訓話とは考えられない。益軒は、封建的な上下の秩序の重要性を説いてはいるが、「人間の性は本来善」など、そこには人間への深い愛と信頼が存在する。心術に述べられる「仁とは」の倫理は、人格の尊重とも読める⁽⁹⁾。

不知不才の人でも、かならずすぐれて得意な所がある。知者はその得意な所をとって、不得意な所をゆるす。ゆえに天下に役に立たぬ人がない。

人に交わるのに愛・敬の2つを心法とする。これは大事なことである。誰でも知らにといけない。愛とは人をあわれむのをいう。にくまないことである。敬とは人をうやまうのをいう。侮らないことである。人をあわれむのは仁である。人を敬うのは礼である。(略)これが人に対して行うべき善である。

これらの言葉は現在の日本の教育界でも、十分通用するものである。

(3) 益軒の教育の役割

松田(1969)は益軒の学問の役割を、次のように分析する。人民の中に儒学を広めるという彼の課題は実は人民の中に、すでに存在するモラルに、儒学の表現をあてはめていくことなのである。17世紀の日本の農工商にたずさわる人民はとりもどされた平和の中で、彼ら自身で自らの人間的秩序をすでに内部でつくりつつあった。家という形で女性と雇人としわ寄せをしながらも、老幼の保護や陰徳という名の教養を行

いつつあったのだ。益軒は貧窮の中に育ち「地行婆」という庶民の女性に養育され、博多の港町に成長して、庶民の生活を知っていた。彼は、そこにある人民の文字になっていないモラルを見ていた。その人民のために書いた訓話が大量性をもちえたのは、彼が人民のことばをしゃべっていたためだけでなく、人民のおこないをしゃべっていたためである。

筆者は松田の説に、益軒の訓話の数々が江戸時代の庶民の心をつかむベストセラーとなった理由を見る。庶民の心をつかんだ益軒は、学問の目的は人としての善をなすこと、つまり道徳を高めることであるとしている。さらに学問は、まず行いの学問であり、人間としての習俗のというべき教えである。『大和俗訓』では有用の学について述べている⁽¹⁰⁾。

学問には有用の学と無用の学がある。我が儒学は有用の学である。学問をすれば、わがため人のため、益になるのをいう。このため学問の道は有用の学をしなければいけない。無用の学をしてはならぬ。有用の学は身を修めて、人倫の道をあつくり、ことに忠孝に努め、善をして人を助け救うにある。

人間としての在り方や、人間のあるべき関係の学問、つまり人格の尊重こそ彼が追及すべき実学であり、行動の学問であったのだ。

(4) 益軒の孝と恩

江戸時代の秩序の中で最も重要なものは、士農工商の身分的秩序である。その各層の中の細胞として存在するのが家である。その家の中に人間序列の順序を維持させるための思想が孝である。孝を第1とし、家の秩序を維持し、幼児の養育や病人の保護、老人の介護をすることは、江戸時代において日本の庶民の習俗として定着していた。

益軒は孝をどのように基礎づけたのだろうか。彼は孝を日本古来のものと捉えていた。当時の庶民は田・山・川・森やかまどに宿る神を信じており、それは天地が万物生じさせたという考えに通じる。孝とは日本の自然であり天地であり、人は父母の恩を受けるように無限の天地の恩を受けているとした。これはすでに仏教で日本に定着していた恩の観念である。これは、益軒が孝を述べる際には、学問というよりは日本の習俗である親子関係をこまごまと述べていることから明らかである。

6 まとめ

益軒は日本は中国より優れているというナショナリズムを持っていた。それは、日本が中国より東にあって、陽気の発生するところに位置するという朱子の理論を根拠としている。益軒は日本には昔から行いの道は存在したが、中国のように早くから文字が存在しなかった故、伝え教えることができなかったという。つまり「初めに行いありき」というのが日本の学問である。つまり益軒はこの古来から存在した道を、中国のロゴスを持って表現することを仕事としていたのである。

益軒の生きた江戸時代の社会的な背景とその思想を、教育思想を中心に振り返ってきた。教育とは、有史以来継続してきた、人が次の世代を担う後継者を育てる作業である。そのため、教育はやがて訪れるであろう次の時代を予想して行われなければならない。現在の国際化・情報化の進む社会で思考力や表現力中心の学力の必要性が言われ、高等教育でアクティブラーニングが模索されるのも、その一例である。

益軒の時代は、急速に変化する今日と違い、次の時代がかなり固定的であると予想される時代であった。戦乱をようやく終えた為政者や庶民がともに、平和と秩序を基本的に望んでいたからである。このような時代には、社会への適応の能力を教えることが、次の時代の秩序を維持することになる。社会の子育てネットワークである「若者組」や「子供組」「娘組」は、従来の社会の生き方や掟を、そのまま次の世代に受け継がせればよかったのである。

『和俗童子訓』の益軒の自信にあふれた文章と内容は、しばらくは安定度が高い社会が持続するという思いに裏付けられているのだろう。社会の安定は、教育の内容的には大きな発展はないが、教育の方法・技術としてはどんどん洗練されてくる。それ故、教育技術の人間の本来的な在り方に触れる部分が純粋な形で示された『和俗童子訓』は、時代を超えて私たちの心に響くのである。

特に『和俗童子訓』から学ぶべきは、過保護の戒めである。益軒は、富裕の家の子どもの教育が困難であると繰り返し語っている。当時の富裕の家の子どもの環境が、現代日本社会の多くの子どもの環境と似通っていることに、筆者は憂いを感じる。

今日、我が子中心の父母は、子どもが生まれたら育児日記や成長アルバムを作成し、外遊びが危険なので幼い時から塾や家で過ごさせる。母親の家事労働が近

代化で著しく軽減され、子どもと一緒に過ごす時間が多くなっている。江戸時代に乳母やおつきの者が行ってきたことを、今日では高学歴の母親が行っている。食べ物にしても当時の富裕家庭よりずっと豊かになっている。しかしその一方で、経済格差は広がり貧困家庭が増加し、教育格差を生み出し、虐待や遺棄され命を絶たれる子どもさえ出てきている。

江戸時代にも「子殺しの習俗」が存在した。今まで見てきた教育論からは矛盾を感じるが、民俗学者の柳田は、間引きとは、「子どもを殺すのでない、育てないのであって、子どもにしないと云うので埋める」と述べている。また江戸時代の乳幼児の死亡率は極めて高く普通に育てても、次々に死んでいき、成人まで丈夫に育つという保証はなかった。このような多産多死の状況で、「7歳までは神のうち」という観念が正当化されていた。つまり今日の虐待や遺棄とは、社会全体の意識が異なるのである。

今日の子育てを考えるに当たり、その世界的な社会的背景は異なるが、第2次世界大戦後70年もの「平和」が続き、秩序となる道徳の教科化が論議されるなど、教育の問いかける課題は江戸時代と通じるものがある。だからこそ益軒の教育思想の問いかける意味は大きい。筆者は今日における『和俗童子訓』『大和俗訓』の意義とは何かを、日本の教育界として考えることが、今こそ不可欠であると考えている。

引用文献

- (1) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「大和俗訓」中央公論社 中央文庫 p 177
- (2) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「和俗童子訓」中央公論社 中央文庫 p 205
- (3) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「和俗童子訓」中央公論社 中央文庫 p 209
- (4) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「和俗童子訓」中央公論社 中央文庫 p 215
- (5) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「大和俗訓」中央公論社 中央文庫 p 121
- (6) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「大和俗訓」中央公論社 中央文庫 p 220
- (7) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「大和俗訓」中央公論社 中央文庫 p 120
- (8) 貝原益軒 松田道雄訳(1969)「楽訓」中央公論社 日本 の 名著 14 巻 p 272
- (9) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「大和俗訓」中央公論社 中央文庫 p 188、65

- (10) 貝原益軒 松田道雄訳(1973)「大和俗訓」中央公論社 中央文庫 p 49

参考文献

- ・ 貝原益軒 松田道雄訳(1969)「楽訓」中央公論社 日本 の 名著 14 巻
- ・ 梶田叡一(2001)「意識としての自己」金子書房
- ・ 小泉吉永(2007)「江戸の子育て読本」小学館
- ・ 高橋敏(2007)「江戸の教育力」筑摩書房
- ・ 梅根悟監修(1972)「世界教育史体系 1 巻」日本教育史 1 講談社
- ・ 梅根悟監修(1972)「世界教育史体系 34 巻」女子教育 講談社